

日本を見つめ直し、楽しく生活、仕事しましょ、シリーズ。

司馬遼太郎の「坂の上の雲」は、明治期の強大な西洋列強国を、見上げる雲にたとえて追いつこうと努力した先人の物語です。

当時、治外法権（領事裁判権）のためコレラで10万単位の死者がでていた時に検疫を拒否したヘスペリア号事件、日本人のみ乗客全員が溺死したノルマントン号事件など、外国人の不法を正したり、国民を被害から守ることができませんでした。

弱肉強食の時代の列強国の価値観では、軍事力が強いこと、国際法を遵守できること、国内の法整備が整っていること、科学技術が高いこと、賄賂などで健全な競争が妨げられることがないこと、などが文明国の証と考え、西洋以外の国は文明国とは見なされず、植民地化が正当化され、植民地から得る膨大な利益と奴隷などの労働力が西洋の国力の源となっていました。

幕末の不平等条約は力の差の結果であり、日本人は有色人種で唯一、総力をあげて西洋に学び、同じ土俵にあがることを決意した民族でした。

日本では古くから、親族の喪服の色は白が基本でしたが、西洋の黒にあわせるなど涙ぐましいほど西洋化にまい進し、日清戦争を機に領事裁判権の撤廃が始まり、義和団事件や日露戦争で西洋諸国に実績をみせ、愚直なほど国際法を守る努力によって関税自主権が認められ、急速な近代化に成功していきます。しかし、急速な近代化の成功は偶然ではありませんでした。

① 国力は国民一人一人の生産性の総和ですが、当時、西洋で最も識字率の高かったイギリスの25%をはるかに超える70%以上の識字率の勤勉な国民が、身分制が廃されて自由な職業が選択できるようになったことで個々の能力を十分に発揮できる環境になったこと。

② 多くの国が、全てのものが帝王に帰属する専制君主制であったのに対して、日本は西洋と同じ、支配者が支配地域の愛着がうまれやすく、近隣との競争原理による創意工夫が生じやすい封建制を長く経験していたこと。

③「悪法も法なり」という遵法精神や、商道に代表される信用を重んじる国民性、当時の西洋と同じ金本位制や高度に発達した金融がすでにあつたこと、清潔を重んじる国民性、などは西洋文明と親和性が高かったこと。

先の大戦から70年を越え、先人達の努力の積み重ねは現代に継承され、日本人の「坂の上の雲」はいつのまにか終わっているように思えます。

